

平成 30 年度 香南市産業振興計画 分野別部会合同会議 議事録

H30.10.31(水)

14:00 ~ 17:00

一寿司会館にて

参加者: 下記参照

(委員: 36 人、行政: 20 人 計: 56 人)

(懇親会: 37 人)

- 1 開 会 商工水産課 小林進行
- 2 挨拶 香南市長 清藤 真司
- 3 合同会議 : 受田委員長、赤池氏 進行

【受田委員長】

本会は当初 8 月末を予定していたが、台風の影響で約 2 ヶ月の延期が余儀なくされました。

しかしながら、本日の開催を待ち望んでいた。

昨年度は「移住」をテーマにして、各部会の取組だけではなく、そこに横串を刺し、繋がるための取組を行った。

移住という横串を刺すことで、様々な意見が聞かれ、それぞれが持っている課題や意欲の比較に繋がったと感じている。

今年度は「観光」という切り口で行うことを提案し、本日皆様にお集まりいただいている。

本日のワークショップの内容を紹介させていただきますと、観光分野では、香南市の玉(光輝く可能性と光を放ち始めた様々な観光要素)が点として存在しているということがわかってきている。

我々はこれをさらに磨いていき、その光を「きらりと光らせる」から「ざらりと光り続ける」ような、ブラッシュアップをしていきたいというのが、色々な議論の中で意見として聞かれるようになってきた。

そこで、この1つ1つの玉を1点1点の輝きとして見るのではなく、「これを繋げていきませんか」と提案させていただいた。

観光要素を繋げるというのは、様々な方法がありますが、本日ご提案させていただく「ストーリー」という入り口を、ぜひ香南市の皆様にお持ちいただいて、ストーリーを繋げることによって、1つ1つの観光要素が、そのストーリーの中でどれだけ「意義」と「価値」を持ち、それをからめていけるか、これを皆さんにワークショップで議論していただき、そして1つに練り上げていただくということが、本日の目的である。

ストーリーというのは、個々で違ったイメージがあると思うが、冒頭に安田町を中心とした高知県東部地域の「ゆずロード」「森林鉄道」を活かした「日本遺産への認定」の取組をご紹介いただき、日本遺産の企画を学ぶところから、「ストーリーとは」、あるいは、「ストーリーをどうやって企画すればその価値が高まるのか」と言うことを事例から学び、それをみなさんと共有したうえで、香南市の魅力ある「観光要素」などをそのストーリーのどのよう落とし込んでいくか、皆さんと一緒に考えていただくワークショップへと移って行く。

まず、ストーリーを作る前に、高知県の観光への取組について 高知県 産業振興推進部 地域産業振興監である前田振興監にお話を伺い、赤池さんからの事例をお伺いする。



(市長挨拶)



(受田委員長 挨拶・進行)

前田振興監：「ポスト幕末維新博」について説明



(前田振興監 説明)

【受田委員長】

ありがとうございました。

高知県の産業振興計画に、このポスト幕末維新博(自然体験型観光キャンペーン)が反映されるといってお話でした。

この後のワークショップでは、様々な企画が提案されることを期待しているところですが、それが企画され、磨かれていくと、このポスト幕末維新博の様々なプロモーションに載せられていくことになる。

また、このような企画を実現するにあたり、ハード整備や参画する事業者に対する財政的な支援等を高知県の産業振興計画や国の地方創生の推進交付金等様々なメニューが用意されている。ワークショップにおいて、そのようなことも考えながら協議を進めていただければと思います。

ここからは「日本遺産」に関して、「森林鉄道」と「ゆずロード」の取組について、赤池さんにお話をいただきます。

少しだけ頭出しをさせていただきます。

「日本遺産」は、文化庁が認定していて、現在 68 箇所ある。国は 2020 年までに 100 箇所を目標に認定を進めている。

高知県はこの森林鉄道の取組に続き「カツオ文化」を日本遺産に申請すべく高知県西部の地域を中心に残り 32 枠に向けて取り組んでいる。

また、この 32 枠に積極的に取り組んでいくように県の中でも動いていることをご紹介します。

本日のワークショップでは、「日本遺産の申請をしましょう」と言うことではなく、日本遺産の考えに基づいて、どうやったら地域の魅力を「価値」として発信が出来るか、そして、その価値を地域内方々にも伝え、「観光としての魅力」がどうやったら発信できるのかという視点で学んでいただきたい。

日本遺産はハードルが高い。よっぽどの企画、特にストーリーを考えないといけない。

誰もがこれを理解、そこを訪れたいと思う中身をしつらえる必要があるので、ストーリーづくりにご苦労されたリアルな話を伺い、地域に広がっている様々な要素を、日本遺産的に言う「ストーリー」として盛り上げていただきたいというのが目的です。

【赤池氏】

当初、香南市には素敵な観光資源が多くあるが点在しているので、自転車等を活用して繋げる内容でご相談いただきましたが、それはどの地域もやられているので、「どう行くか」ではなく、「ストーリー」として「どう繋ぐのか」と提案をさせていただき、本日の「香南市版ストーリーをつくろう」というタイトルになりました。

日本遺産は世界遺産とも内容が違います。

日本遺産とは、一番大切なところは「地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーであり、文化庁が認定するもの」です。つまり、日本遺産とは、ストーリーのことです。

これは国内だけではなく、海外へも積極的に戦略的に発信していくことにより、地域の活性化を図

ることを目的としています。

世界遺産とは、大仏とかお寺など、文化財の価値、それがどれくらいの価値があるかが大切で、日本遺産とは全く異なる。

日本遺産は、地域に点在する遺産、これは文化財的な価値がものだけではなく、文化財はもちろん、道ばたにあるお地蔵さんまで、また、食べ物、言葉等を含めて、文化財の格付けではなく、地域の遺産を面として活用し、発信することで、地域活性化を図ることが求められている。

いまいわからないと思いますが、香南市にも色々な文化財や史跡、歴史的建物、食べ物等あると思いますが、皆様にチャレンジしていただきたいのは、例えば、「この仏像とこのお寺は歴史的にこのような関係がある」ということではなく、「様々な文化資源を1つのストーリーとしてパッケージ」していただきたい。

できれば、そのストーリーを発信するにはどうすれば良いかまで考えていただきたい。

ストーリーというのはキャッチコピー、例えば「おいしい・たのしい・香南市！」のようなキャッチコピーではない。

1 つめは、「歴史的経緯や地域に根ざし世代を超えて受け継がれる伝承や風景等を踏まえること。

2 つめは、地域の魅力となる明確なテーマを設定の上、建造物や遺産、祭りなど地域に根ざして継承・保存がなされている文化財にまつわるもの。

ここが非常に大切なところです。「香南市の〇〇という観光地がすごい！」というのは、観光資源の魅力としてはあるが、地域の魅力ではないのです。

3 つめは、文化財の価値を解説するものになっていないこと。

例えば、森林鉄道について、昔はこうだったという話は、森林鉄道の価値を解説しているだけになってしまう。

4 つめは、専門知識を持たない人も興味や関心が持てるもの。

森林鉄道の話だけでは、鉄道が好きな方等、一部の方しか興味や関心がわからないことが見込まれる。

5 つめは、ストーリーの場面が想定されるような写真・図表を用いて A4 用紙を2ページで作成するとなっている。

この認定基準を踏まえ、本日のワークショップでは、香南市版のストーリーを考え、タイトルをつけていただくことを考えている。

実際の安田町の取組を説明

ワークショップに入る前に大切な考え方をお伝えします。

まず、〇〇がすごい！▲▲の歴史的価値があるだけではダメである。

また、突き詰めればどんな地域もオンリーワンですが、外の方が魅力を感じるかどうかは違う。

ある町では「土管」生産量が日本一で、日本で初めて下水道が整備されるなど、町の誇りとなっているが、それをどれだけの人が魅力に思うかは別の話であって、外の方を意識してください。

最後に、高知県とも、他市町村とも違う「香南市」のものは何かを題材にしなくてはなりません。カツオやおきゃくの文化を取り入れても、それは高知県のどこでもある。香南市のおきゃくはこうであるという様なものがないといけない。

地域の魅力というのは、端的に言えば「五感で体験できる今の魅力」である。

例えば、森林鉄道を使って昔は通学をしていた経緯があっても、それは今乗ることが出来ない。

今は五感で感じる、つまり、「見ることが出来る、写真を撮ることが出来る、触ることが出来る、癒やされることが出来る」等になります。

このようなことを、文化財の魅力では無く、地域の魅力として考えていただく。

例えば、昔は月夜の晩に古民家でわいわいおきゃくをしている声が聞こえるとした場合、非常に情緒もあり、聞こえる・感じる等の体験は出来たと思いますが、あくまでも、外の方が五感で体験できる魅力を考えていただきたいと思います。

本日は、香南市の方、外からの移住者、香南市外の方など、様々な方がいると思われませんが、ぜひ、地域の意志や思いを「よそ者」「香南市で活躍されている皆さん」の視点で、ストーリーを描いてほしい。

簡単ではないが、本日はストーリーのタイトルを作ってください。

タイトルですので、「香南市のキャッチコピー、「おいしい・たのしい・香南市！」ではダメ。

それでは、はじめに各班で自己紹介を行っていただき、香南市の魅力を机にある用紙に書き出してみてください。

その際、〇〇があるではなく、五感で体験できる香南市の魅力、つまり、〇〇を見ることが出来る、食べることが出来る、買うことが出来る等を書き出してください。

ワークショップ後半では、地域のストーリーのタイトルをつけてください。

その際、日本遺産のストーリーの5つのルールに注意してタイトルをつけてください。

これまでの「観光」というテーマを一回忘れていただいて、皆さんなりにストーリーを描いてください。

最後にみなさんと共有を目的とした発表を行います。

【受田委員長】

これからは、我々もフィールドを回りながら、皆さんと共に進めて行きたいと思えます。
今日1回で素晴らしいものが出来れば良いですが、本日はぜひ、一緒に産みの苦しみを味わい、その苦しみを味わう中で香南市の魅力と共に再認識しあいたい。



(赤池氏 説明)

○ワークショップ 開始 (前半 40分 後半 30分)

ワークショップのルール:各班に行政の方が入っているが、各委員が中心となり進めて行く。

(ワークショップ時の風景 1班)



(2班)



(3 班)



(4 班)



(5 班)



(6 班)



(7 班)

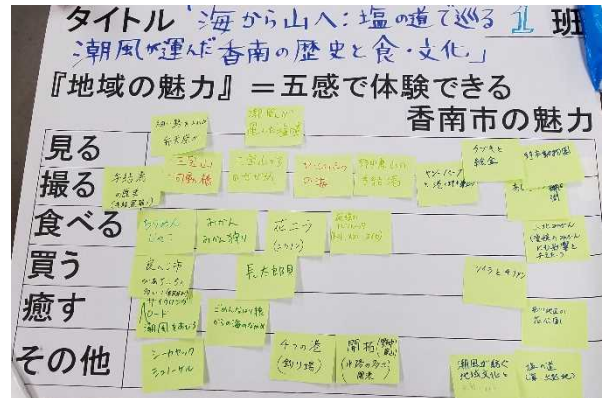


(8 班)



○発表

【1班】海から山へ、塩の道で巡る潮風が運んだ香南の歴史と食・文化



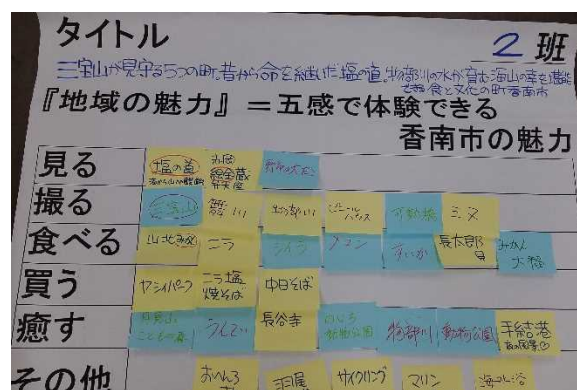
各項目で様々な意見をだし、タイトルをつけた。

海から山に塩の道を通じて上がることで、「潮風」が色々なものを運んでくれるというようなストーリーにしている。

潮風が海産物や絵金や弁天の歴史、文化、食を含めて、塩の道を通じて海から山へ繋げていく文化を加味しタイトルを考えた。

【2班】三宝山が見守る5つの町。昔から命を繋いだ塩の道。

物部川の水が育む海山の幸を堪能できる食と文化の町 香南市

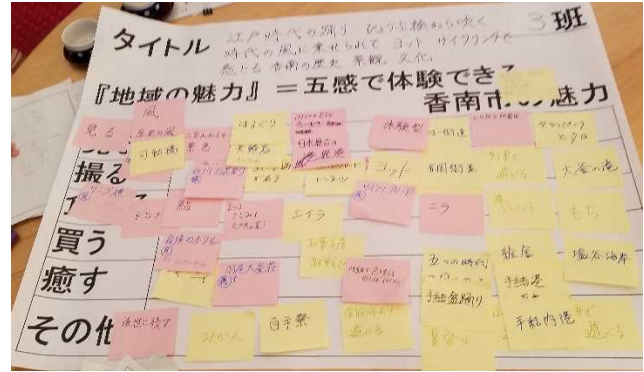


はじめから「塩の道」というキーワードで話を進めた。塩の道は歴史も繋ぎ、人と人も繋いでいた。また、赤岡町にターゲットを絞り進めた。

色々なものがありすぎて、まとめるのが大変だったが、PRとして塩の道や弁天座、絵金蔵の歴史、美味しい幸を繋いだ「塩の道」をテーマに色々な人の暮らしを繋いでいけたらという思いがある。

【3班】江戸時代の踊り びょうぶ絵から吹く時代の風に乗せられて

ヨット サイクリングで感じる香南の歴史 景観 文化

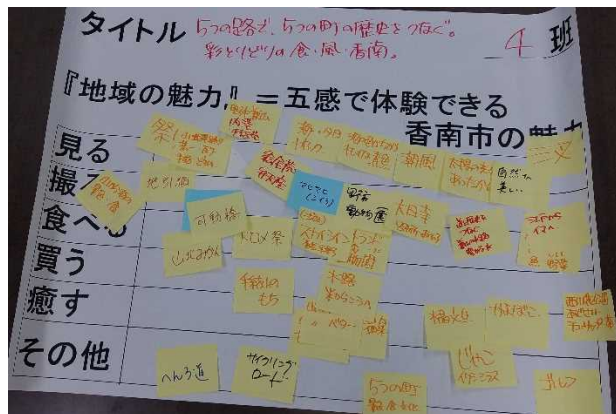


メンバーは夜須町出身者が多かったのでこのようなタイトルとなった。

日本最古の堀港湾である手結港にはハマグリの話がある。新聞にも載っていたが、野中兼山は江戸へ出てから船にいっぱいハマグリを積んで帰って来た際に、なぜか積み荷のハマグリを手結港に投げおとす。村人はなぜハマグリを?となったが、そこで兼山は「そのハマグリは村人へ届けたのではなく、孫のために、次の世代のために運んできた」という逸話で、この話は「手結の盆踊り」の中にもある。

今の時代で、観光も人も全てそうだが、我々がやるのは、「次の世代」のため、「次の次の世代」のために取り組んでいくことが大事であるという部分をタイトルに反映させたかった。

【4班】 5つの路で、5つの町の歴史をつなぐ。彩とりどりの食・風・香南。

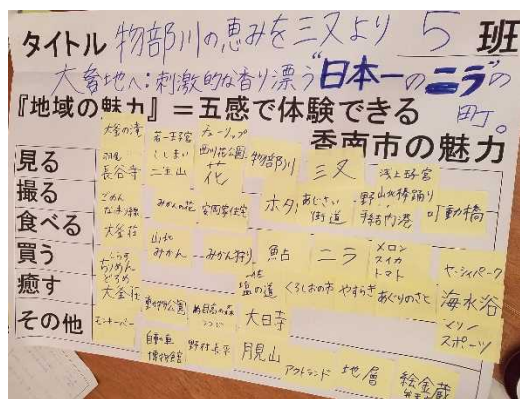


「香南市の中から魅力を発信するという人」と「外からの視点を持った方」のメンバー構成だったことから色々な意見をだしたが、どんなキーワードを活かすかを検討してポストイットを移動させながらワークショップを行った。

様々な視点で、意見が出たが、最終的に①土佐塩の道、②野中兼山の作った水路、③サイクリングロード、④へんろ道、⑤スカイライン など様々な「路」が香南市は行き交っていることと、5つの町にそれぞれの文化・歴史や見所を持っていることから、これらのことをぎゅっとまとめた。

「彩とりどり」については、①海の青、②みかんの黄色、③ニラの緑、④スイカなどの赤、⑤どろめの白といった食などの五感を感じる色を込めてある。

【5班】 物部川の恵みを三叉より大地へ 刺激的な香り漂う、日本一のニラの町



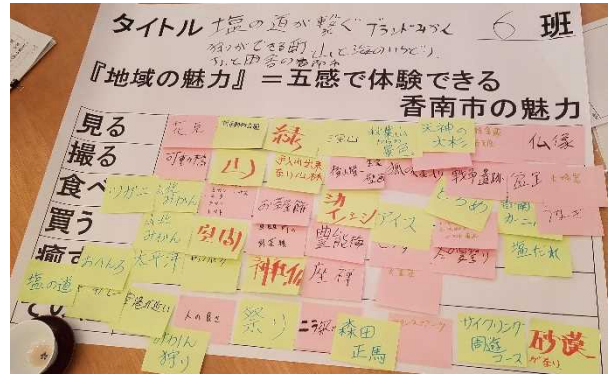
メンバーで様々な体験を洗い出し、今回は野中兼山の「三叉」にフォーカスをあてて、ストーリーを考えた。

物部川という水の恵みを野中兼山が「三叉」作ったことで、野市町を中心に水が行き交い、今は日本一のニラ産地となっている。

ニラの香りは独特であることから、刺激的な町を表した。

【6班】 塩の道が繋ぐブランドみかん狩りができる町。

山と海のいりどり、ちょっと田舎の香南市

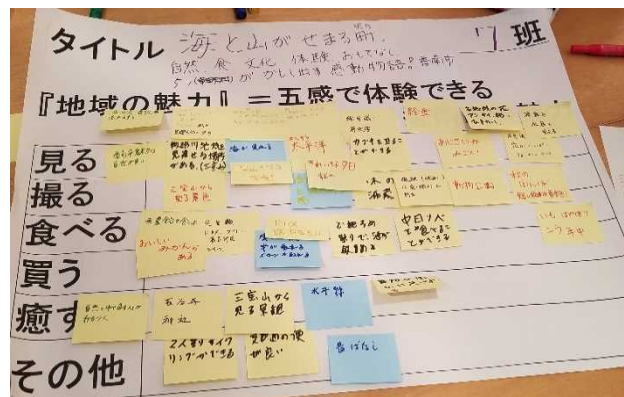


歴史に詳しい方やずっと香南市で生まれ育った方々の意見を参考に、やはり歴史がほしいという考えから「塩の道」が出てきた。

外からの目線も考えて、山北みかんを取り入れタイトルを考えた。

【7班】 海と山がせまる町 自然 食 文化 体験 おもてなし

5つがかもし出す感動物語！香南市

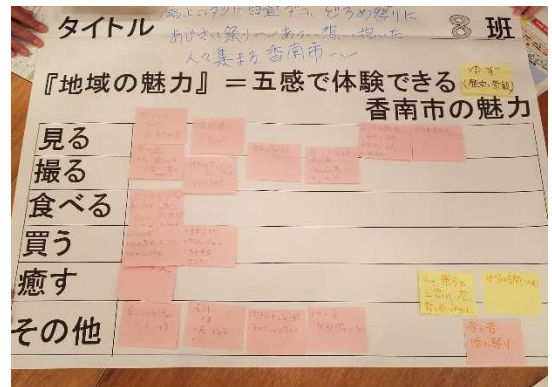


香南市の魅力は、山と海が近いし色々なものがあり楽しいこと。

極上の握り寿司ではないけども、気安く楽しめる五目寿司のよう町なので、このようなタイトルをつけた。

【8班】 路上コタツに 百畳ダコ どろめ祭りに あじさい祭り

～ あつい思い抱いた人々集まる香南市 ～



香南市の魅力について話し合った結果、他の班と同じで、海・山・川が出てきたが、歴史も一緒でしたが、一番の魅力を「人の温かさ」や「先人の思い」に置きました。そして、香南市は週に一回どこかで「祭り」が行われているくらい祭りが多ことから、「祭り」をキーワードにいれたタイトルをつけた。

他県の方が見たときに、路上コタツ？ 百畳ダコ？ どろめ？ なんだろうそれは？とすごい興味を持つはず。

でも、その最後には「香南市の祭りは、みんなのあつい思いが詰まった祭り」であることを伝えるためにこのタイトルをつけた。

◆各発表についての意見

(2 班)

1 つ核となるものを見つけて作り上げていくのは良い。

「三宝山が見守る」というフレーズが、三宝山という香南市の皆さんの位置づけや思いが、1つの山というよりも、歴史的に見守ってくれたという1つの思いを感じられた。

(3 班)

・絵金とマリンスポーツを風で繋いだことはまさに地域のストーリーである。

各々は今後もそれぞれ続いていくし、土地の繋がりとしては、旅行の行程で赤岡～夜須間は繋がっていきと思われるが、1つのストーリーで、例えば、絵金を照らすろうそくの灯火を揺らす風から、ヨットを動かす大きな風まで風景が見える。これが言葉でしか繋げない風景だと感じる。

(5 班)

ニラの畑の近くの香りとそぎたてのフレッシュな香り等、ニラの香り1つとっても多様に感じれるのは産地の特色である。これからストーリーを考えたときに、五感の1つである香りを取り入れる事は非常に大切。

(6 班)

・「彩り」というのが香南市の魅力かもしれない。

5 町村だけではなく、山も海もあり、目に見える色もあるし、鮮やかな景色・景観があることが香南市の魅力だと感じるので、彩りも具体的なものがストーリーの中に反映されていくと想像できる。

「彩」という言葉は深みが出る。

・彩り、色 というのが出てくると イメージが膨らんでいく。色自体が相手に伝わり、地域の魅力自体が「観光」という誘客に繋がっていきと感じている。

(7 班)

・キーワードは「5」である。5 町の色が皆さんの中にあるというのがよくわかる。

・五目寿司のように香南市に色々な味がちりばめられていることを表しているのは言葉のうまさを感じる。

(8 班)

・「祭り」というキーワードは大きな日本遺産には必ず入る。

・香南市の DNA とはなにかと考えたときに、「人のあつい思い」はもしかしたら、「祭り」というもので表現されていて、それが歴史的にも、新しい町にも、古い町にもあるのですが、「祭り」という形で皆さんの中に、ずっと続いてきている DNA が表現されている。

◆ 総 評

【受田委員長】

各班の作品をお聞きになられて、比較されたときに特徴になるようなこと、さらには、相通じているところもあったと思う。

ここで、相互に新たな「気づき」があったとするならば、その気づきというのが、香南市、香南市民として「誇り」として受け止めること。あるいは、それぞれの強みとしてしっかり認識していることと言うふうに考えて良いと思う。

各作品をみて、「5」というワードが随所に出てきたことが印象深く感じられた。

「香南市」と1つで考えるとこのキーワードは隠れてしまう、消え去ってしまう可能性があるが、この「5」というものは、皆さんの意識の中にすごく根付いていることがわかりました。

そして、香り、色、潮風、風というようなワード、風については肌で感じられるものとして捉えられる。5という数字に加え、五感という部分では、皆さんの中には「香南市の持っている資源」＝「五感に訴えていくもの」という感覚が潜在的にあるのかなと感じて聞いていた。

風や彩りについても出てきましたが、「5」というワードと「自然」との関わりの話を致しますと、「五重塔」の各屋根は上から、空・風・火・水・地を表している。

「5」という数字に集約をし、シンボリックに示していくということは、「ストーリー」原型かもしれません。7班では、「自然 食 文化 体験 おもてなし」という感覚以外の5つの要素が示された。

このような「5」というもので集約させながら、みなさんの心が描く「五重塔」みたいなものが、今日のストーリーを描いていく話の中で、少し見え隠れしているように見えた。

全体を通して、たまたま隣に、同じテーブルにお座りになられたメンバーで議論していただいた。

産みの苦しみを分かち合った時間もあったと思いますが、こうやって色々な気づきがあり、香南市の財産というものを数字や感覚というところで1つあぶり出したということは極めて充実な時間だったのではないか感じている。

今後、これをどういうふうに活かしていくかは、皆さんと共に、または、各部会の立場で持ち帰っていただいて、さらに議論を展開していただきたいと思う。

さらには、8つのグループで議論した内容を「いいとこどり」したり、最大公約数的な「共通する部分」をさらに抽出することで、今日の集大成から「こういうものを企画できるな」というものを行政の中でもんで、提案したり、あるいは、参加された皆様の中で、「このようなことを考えのだが」と提案をしていただいたりして、そこから、具体的に「観光振興」に活用できる具体的案をさらに出していく等、活用をしてください。

【赤池氏】

◆ 今後の活用方法について

地域のストーリーを描く大変さも感じていただけたと思いますが、描くことによって見えてくることもあって、暮らし・自然・食・農業・水産、工業・商業など、地域の魅力が色々あることを改めて感じたと思う。

そのどれもが、香南市の歴史や文化と結びついていると感じていただいたと思います。

「自分たちの文化・歴史ってなんなのか」「何を観光客に伝えたいのか」ということを地域の中で議論する素地がやっと出来たのではないかと感じている。

観光客にいっぱい来てほしい気持ちはもちろんありますが、「自分たちの文化・歴史ってなんなのか」「何を観光客に伝えたいのか」をもう一度、自分たちで考えて、外から来る観光客に「観光」という手法で売り出していく必要があります。

皆さんにも、観光の商品化ももちろんだが、香南市ってどういう歴史があって、どのようなDNAが流れていて、それが祭りなどに再現されていますので、外から来る人に「何を伝えたいのか」を、今日を機会に、各お立場で検討していただければと感じている。

【受田委員長】

今後、観光振興において、「点を点のまま孤立させる事無く、線として、面として、時空を越えて、5というキーナンバーも出てきましたので、常に5を基本単位として、香南市を革めて、価値創造、魅力の遡及をしていく」というところを議論していただきたいと思う。

長時間にわたりお疲れ様でした。

4 閉 会 商工水産課 小林進行

以 上